重修真書太閤記

十編 三

和書門 類 一六二二一 號 二〇 函 九 架 一一〇 冊

内閣文庫 和書 類 一六二二一 號 一一〇 冊 一一 架 一七一 函

内閣文庫
番號 和 16221
冊數 110(93)
函號 171 39

国立公文書館 National Archives of Japan

重修眞書太閤記十編巻之七

秀吉公再度不意を討事

并根來寺衆徒滅亡の事

四種の輪王とハ金銀銅鉄の輪王と云金輪王ハ風を望て化に順ハしめ銀輪ハ使を遣はして方に降し銅輪王ハ威を震ふて乃服せしめ鉄輪王ハ戈を奮ふてこらしめて定むといへり秀吉公の兵を用ひ玉ふことよく是に似たり又根來の法師ハ放逸邪見にして不動明王を祈るといへとも其本意をそに明王の誓願に外れたり何として其利益を垂玉

夫れ抑不動明王ハ國家鎮護の為に悪魔降伏の
形を顕し給ふ故に稽首聖無動摩訶威怒王極
大慈悲心愍念衆生本体盧舎那佛と説たり然る
に僧徒の身として慾心を専とし忍辱の衣を殺伐
の鎧に易慈悲の袈裟を残害の母衣となし財寳を
争ふか為に死傷をかへりみず王命に背き武命を
拒く形ちあるハ法師にして心ハ盗賊に比し秀吉
公ハかのの共を戒沙汰をハ天平泰平なるへう
られと思召し十餘万の大軍を發して之を責ら
とけくそれ十餘万の兵糧一日千石を費をへけると
ハ十日にハ万石に至る千石の米ハ五十町の田に

生ぶ五十町の田ハ百姓百人の耕を処と知へし百
人の耕を処を以て軍勢十餘万一日の食に當とハ
千人の耕を処十日の食にあつる是に加ふるに塩
噌と薪あり又運漕の夫食を與ふへし然ハ大軍を
起すとも容易の事にあらバそもそも根來寺の衆徒已
か悪行をかへり見バ民の難義を辨へバたゞ不動
明王として秀吉公を誅戮せしめんとあらうるも
明王の体に釼を打しと僧徒の残忍無頼たとへを
取に物なし然るに寄手陣を開き三千餘人の荒手
を加ふ是全く明王の加被刀とおのびに明王の祈と
止めしとりや秀吉公さつの杦本岩室両坊主の勢三

千餘人を寺中へ入らせしハ深意ありてなりけり寄手ともを止めハこの三千餘人必定四方へ散亂して徒黨をあつめ一揆を企へし然らハ根來の外に又根來を設くるか如し是を根來寺中に入たらハ寺中の兵氣ハ自然と緩ミ且他に同類を催ふさ患なしと實に遠く謀て云ふ処と云へし果して寺中にてハ三千の荒手を得て今迄さへ十分に防戰せしに又三千の新手且杉本岩室両坊主の勇あれハ寄手を追拂ひ法敵を誅し佛餉を安くせんと疑ひなしと思ふより自然と互に氣もたゆミ寄手抔慢る心を生し杉本岩室の兵ハ積善寺にて手痛く

戰ひし勞武者と知られけるにそ憂悒けせし秀吉公ハ其日の薄暮にいたるをまち時分ハよきぞとやせめよと御下知ありけれハ大和大納言秀長卿の一万三千餘人旗の手をおろし楯竹束を突立ゑいゑい聲を出して責立る此もの共ハかねてより案内ハ知たり秀吉公の内意ハ得さりつれハ高名して日頃の武勇をあらハさんと無二無三にせめ寄けるにそはや先手ハ柵際近くなりにたり先陣何とも進んて逆茂木引退けて入んとひしめくを見て後陣ハおもとに越して命をハ塵芥にたとへ義を鉄石にひとしく責立けれハ匆々に防き止へき

様をなし寺中まで入荒手三千餘人ハ心をゆるし
軍ハ必明日なりと持場〱に休息し寐ゐたりし処
へ鬨の聲引續きて十万三千餘人短兵急に責立し
かバ以の外に狼狽し太刀よ刀よ弓よ鉄炮よとう
ろたへさハぐ次第ゆゑとて隊伍ハ立ず加之あの
程の疲ハ十分いかにして防ぐべきやと上を下へ
混亂しけるぞ道理なり老僧達ハ本堂へかけ入不
動明王を荒縄にて縛りかけ調伏の法を修し只
今の間に去るしと見をなへと攻立ていのれども
その甲斐更に見えざれバ去ぞ寄手の大勢透間なく追
手の柵を打破りくや塀下に詰かけたり強悪熾盛

の荒法師同宿ともを引率し一揆の勢をさし加え
門下支え命を限りと防ぎけるを見て本堂にハ
よいよ強く責たてゝ護摩の烟に眼も明ざるを前後
夢中に修法をなしけるもおろかや調伏の非道の祈
りに明王の火焔はさらに紅いろと増なびくと見
えしハあへふしき本尊の壇上震動し四方八方の壊
も知ず燃上り天井にうつる炎の迦樓羅焔天を焦
して焼立されバ衆徒一同に仰天し逃出んとそれと
も足痿て一歩も進み得ずあまりのさまにあきされて
て猛火の内へ飛入く真黒になりて焼死ける形勢
ハ生ながら阿鼻焦熱の苦患を眼の前に見るも是

よハいかゞ増るべきとあさましかりける次第なり追手を固めたりし大衆本堂の火災に驚き是を援けんとせしハ寄手ひまもなく攻付たり敵を追拂てその後ハ本堂の火を消んとせしハ黒烟天をおかして聖覺上人以来相承の口訣儀軌ハなそあまも傳授を重んじ師資の秘藏をへて一時の滅度となる我慢邪見の意よりもさこそうよおしくとやおもひけん法滅の餘燄に胸をいたましめ合戰も心に任せざれバ寄手ハ勢に乗て攻立ければ難なく寺中へ切入あまたを得たりと切たをし薙ふせたりのまゝに振舞ける程に日頃ハ力量を自

慢しける悪徒共も此期に及んて心おくれて勇も武もいふ甲斐なき雑兵下部に切たてられて敵に逢てたゝかふものなそなかりけれ其外の若法師原ハ爰に討殺されしかに突伏られ又ハ火の中へ追入られて非業に死するも多かりき秀吉公ハ兼て謀られたる事なれバ出口々に諸大将の勢を分て置れけるになかゝ一人まても漏るゝものなかりけれバ爰に範如圓覺といへる二人の悪僧ともく所詮のがれぬ戰場なりとて如法深夜のことなれバ透を見合を切抜て太田の城へ落行しかし又叶ハぬ其時ハいさぎよく討死せんと二人ひと

しく大長刀と打かゝり乾の方へと走り行此方ハ伊賀の國主筒井か勢にて固めたり二人の荒法師元より必死の覺悟なり打破りてとおのゝ定めし処なれバ筒井か勢の眞中へ面もふらず切て入竪様横様十文字にかけめぐりて颯と引打開いてハそろつと落あへや落ると見し折しも筒井か勢の其中より嶋左近友之今年ハ四十六歳血氣さかるに滿々て心利たるものなりしハ圓覺に走り向ひ突つつかれつ上段下段をさ間を伺ひ戦ふたり圓覺も根來第一の兵法者なり身の丈六尺七寸力ハ五十人にて引動かし石を一人にて取廻せしとの荒法師

なり追つおつしつ半時あまり押合けるか圓覺長刀とりなほし打たてけれバ組んと大手をひろげ飛かゝる左近ハ組れしと浮つ沈みつあしらひながら丁と切てハそらしと切持て開いてそらしと打元より名譽の劒法者推つおさへつ揉あふたるに圓覺眉先かゝく切なまれそらし疼む処を得たりとふみ込終に押えて首を取範如ハ圓覺か討れしを見て我身の上ともおもひ切筒井か勢に切かゝり四方にはしり八方にまはり合て戦ひけるかども多勢に取こめられ亂軍のうちに討れけり嗚呼根來法師この年來武命王命ともに拒みける故

か月日も多きに三月廿一日に滅亡しけるぞかし
きなり秀吉公長閑かに登山ありて諸堂の下火と
しめさせその夜は本堂の前に陣を取玉ひ夜明け
しかは生捕のものを呼出し討取し首の名字を尋ら
れけるに衆徒の首すべて七百余諸牢人の首三百
五十餘生捕の僧百余人を近郷近里の百姓千餘人
なり是等が費を処一日の佛餉すべて十餘石なれは
一歳には三千六百餘石に及ぶその外雑用を合
せて万餘石なるべしあはれ無用の國賊なりとて
悉く山内を滅却追放ありしかは人みなこと聞伝へて
し諸寺諸山の僧法師肝をひやし今まで貯たりし

武具兵仗を活却し薄氷を踏むこゝちして一日〳〵と
過しけるとなりそれより秀吉公は太田の城へぞ
寄られけり
因云國花万葉記に大和國春日社二万二千石東
大寺二千二百十餘石興福寺領二万千百廿石余
法隆寺二千石余吉野藏王堂千十三石内山永久
寺千石多武峯三千余石と云是を合せて五万三
千石に及ぶ其外三百二百以下の寺領社領挙けれ
いくそくぞや攝津住吉二千百石天王寺千二百
石紀伊國熊野千石高野山二万千七百石出雲大
社五千石伯刕大山三千石筑前大宰府二千石筑

後高良社千石豊前宇佐宮千石日本國まてハそ
どゝろぞや

千石堀濱の城合戦の事
并一揆退散衆徒敗軍の事

千石堀とよひ濱の城に籠る所の一揆ともハ昨三日の朝積善寺に籠りし衆徒并に一揆とも寄手に合戦しける体をとゝる寄手ハ目に餘る大勢なり然も時々刻々に勢加そとハ兵氣盛んにして閧の聲をあげ螺鐘をならしき刹那も絶を衆徒一揆ハ限りある一人討れハ一人を減ず加之寄手の手強く攻付るを見て氣おくれ力たゆミける所に積

善寺の衆徒の討出しを何事にあの大勢にかけ向ふて軍をはそや危ふし／＼城を只今付入に攻入れなんハ孫てへ互に力を合をへしと約束ハしける共彼体の猛烈き軍兵に何にして手を合をへき只此処を取かざはを功とをへきなりと去ねうら味方に取て一の腕を失ひける心地をはそ此末如何をへきと評定しけるに小賢けなる衆徒一人進ミ出て申けるハ不審き事のいそや秀吉自身出馬して岸の和田に在陣をしと相違なし軍勢も六七万へたしかなりとうやいうるも今の秀吉なきとハ左も有へし依て其体を伺をとしに秀吉岸和田にお

るかしハ此三城へ寄る兵も今ことし多くうら軍の様もさそうし急ならんに只寄に寄たるのミかし左のミ手痛く攻もせバ積善寺の勢とも打出たすとも打漏したるあと日頃秀吉の軍ありと違ひたり定めて秀吉深き謀のありつるならんとおのゝしりハ又も恐ひを出してあれと伺ふに秀吉岸の和田に在りし如くハ見えずなりし只おやしミへ諸侍とも更に本陣に出入をするのなりといへり然ハ秀吉まことハとそに雑賀那賀あたりへ陣をうつし根來の本寺へ取かけしに非ずやけてさぞ此処の軍ハかくの如くぬるきなるへし是ハ我々を爰

に繋ぎ置べきための虚にてあらんと覺ゆるハ如何と放言しけるハ山内天井濱高揶以下の諸守人ハかねても左なる心付かるれど感心し左あらんにハ此処に居ることもとふる益なしとて急ぎ根來へ引返し秀吉と防ぐへしたゞし秀吉ならやく根來へ向ひたらハ我等ハ秀吉の後陣より討てて軍をすべきなりさてなからハ此事を濱の城へ知らせまうさんも口おしき次第なるべし急ぎ告知をべしとて恐ひにあまし根來法師ひそかに濱の城に至りかくと談ひけるに濱の城にても小う揃て不審におもひしてなれハ一義にも及ばれ同心し同日午刻に開城して根

來へ帰るべしと約定一決しまづ千石堀の衆徒一揆一万余人城戸を開て突て出當城の寄手ハ近江中納言秀次卿を大将として中村式部少輔一氏蜂屋出羽守頼隆長谷川新三郎渡瀬小次郎佐藤隠岐守以下八千余人なりけるが積善寺の城に籠りし衆徒一揆打出て根來へ引返しつるをおつかへハ此城の者とても油断をへきるあらハと備を固くし用意怠りなかりしかハ八千余人を長蛇にそなへ一万余人を真中に取こめ一人も餘さしとうまへさり城中より打出し兵ともハ南國に名を滑しものなれハ双方をろしもためらハず浮つ沈つ切

合たりまでに烈敷合戦ありしが親にまれても子ハへつらハ兄手を負とも弟たすけず乗こえ〳〵進みたり濱の城にハ鈴木源左衛門大橋高松をはじめ是も總軍一万余人同じ時に切て出此手へ向ふハ堀久太郎秀政高山右近大夫照坂甚内安治藤堂源助高虎以下八千三百余人をとむや城より切出しハ一人も漏さじと火花をちらして攻かゝれバ城中より切出しゝの共ハいろにもつておさへ打破り根來へかへり入んとひしめくを寄手ハこれを追かへしあくまで城中へ入べしと攻たり城中の兵の中にもさるもの多くありけるにより寄手の意

さもやくも悟りかくてた勿々寄手をやぶりてやくさし然れ様こそあれやと謀を定め一揆の張本十三人づゝ一手〳〵に組分どのとさためかく突立れハ寄手やけやぶられ思ひ〳〵七八段引退きたる一揆の中にも天井濱山内三郎大夫ら一手難なく寄手を突ふせて些つと圍を出たりしかハ逃行んこと安かりしかども残る味方を打すてんもさすが不敏におもひけく又引返し秀次卿の旗本へ切かゝる秀次卿の旗本にてハ油断して休息せし処なりし死もの狂ひの一揆ともにかけ立られ備ふされてまとまらバ右往左往に散亂し一揆ハやゝくと見ゆ

より雑賀那賀の組々を引退けて圍をやぶり出なから濱のものどもハ如何にせしやと見かへりけるに山内天井濱火花をちらして切合たれハ鈴木大橋まで引かへして切かゝり寄手多けれども一揆のちからをさけしけれハ終に打もらして退せけりけれども堀久太郎ハ軍に功の入しものなれハ跡よりおびたゞしく追かけ切処〳〵に攻付たりけるほどに高柳監物ハ脇坂にうたれ西郷平内大夫ハ藤堂にうたれしかとも一揆その數八千餘人雑賀をさして引退く

重修真書太閤記十編巻之七終

重修真書太閤記十編巻之八

秀吉公太田城水攻の事
并一揆等降参の事

千石堀濱の城にありける根來の衆徒并に一揆とも二万餘人と聞えしもわづか二千餘りに討なされ闇夜に乘しそう〳〵逃れ走りけるが根來本寺の様子を聞バとても秀吉公の為に本堂諸堂社をすべて焼亡さると根來一山滅却せし由なりしかバ衆徒一揆いづれも力を落し此上ハ雑賀の太田次郎左衛門が楯籠りし太田城に入て兎も角もなるぞや

とて夜ハ更ぬれど案内知たる道筋なれバ二千余
人我先にと足をそやめげり柳の城に籠る一揆
ともがらハ三万余人と聞えしかども根來寺の滅亡
せし由を聞しより臆病未練のものどもいつしか
落失て今ハ城将次郎左衛門尉が一族門葉のもの
又ハのがれぬ所従眷屬ばかりに三千餘人になり
ぬたり此者どもハ流石雑賀まで名を得し勇士と
て日頃腕立しつるものなれバおのが主従の好もこ
れにあり落もせん残り止まるかとすれハ少も
恐れを明日ハ定めて秀吉押寄らるべし花々敷
防戰して手並のほどを顯すべし今夜かぎり

の命なり一盃の酒に無明の夢を醒し一期の思ひ
出なり面々の藝を施こそよやと歌ひつ舞つなし
ける処へ千石堀濱の城の者ども二千餘人にて落
來りたり太田對面して今まで籠城し寄手と合戰
の次第を聞かハ是まで落來りし志のほどを感
し我等が勢をかりまでも十分に防戰をなすべく思ひ
し処にかくの加勢二千餘人合せて五千餘人あ
つまれ勢やたの者ども何れも一人當千の者ども
なり秀吉の十餘万にかけ合をて何かとくと取
へさやといよいよ勇氣を増て寄手をまつ心の内な
を武かりけれ夜もすでに明果れハ秀吉公御下知あ

りて總軍一同に太田の城へ押寄らる秀吉公にも
後陣に御備を立らるとて見物なしなれバ秀長卿先
陣に進んで短兵急に攻なふたし此城四方深沼
にして一万三千餘人の勢を配りて進退自由なら
しむべき地の理にあらず城に向ふハ只一筋の細
道なり大和河内の武勇の者眞先に進めバ城中に
てハ逝々と引受弓鉄炮を以て是を防く寄手心ハ
猛けれども防く術の地理によりなへハ進ミ得ず其日
も空しく責口を引退て陣を固む翌五日よりハ秀次
卿を始として黒田蜂須賀堀中村蜂屋高山長谷川
脇坂藤堂以下悉く參着しけれバ寄手ハ誠に雲霞

の如く野にも山にも満々たりかの城を十里
廿里に取巻たれバ遁れ出べき様もなし籠中の鳥
にも似たりされども太田ハ聞えし勇士なり要
害に籠りければ少しも氣を屈さず責れバ弓鉄炮を
以て此をふせぎ圍めどもおそれとものうとも
をび寄手ハ太勢なり一時に責潰さんとおめへ共
長たらぬ沼水にせん方なけれバあきれはてゝ只遠
遠と陣をとり備を立てよろしきに秀吉公ハ城の
容体巡見ありて諸将に下知しなひけるハ此城ち
いさけれども要害よし一揆とハいへども太田ハ
さるものぞ急に攻なバ味方を多く損ずべしたら

し當城平塲あり水責にあふべきなり其用意をせよ
と下知ありて城の四方に堤を高く築き吉野川の
末流紀の川といふ大川のあるを堰入たれバ三日め
までハ城中に水入てけり然とも一揆等をとしも恐
れず櫓に上り木の枝に床を掻てあとに住
太田村に云傳ふる処周廻五十三町高六間敷十
八間馬踏五間一間に晝夜六人づゝ總人夫四
十六万九千三百人とかや此下行米千俵大豆百
表となり一人米八合五勺を賜ちうしと云
城中のものの心ハ猛しといへとも水ハ次第に深く
なり兵糧の蓄も濕れハ日々の用を闕鉄炮玉薬も

水の為にねばしくて今ハ為べき様もなし折しも不
思義や城の乾の鎮守の森の蔭より一尺ばかりの白
蛇あらハれて水に入ると見しがたちまちに浪逆
だちて水渦をなし雲起り雨ふりそゝぎよはおそ
ろしく霹靂めき忽然數十丈の大蛇光りをはなち
て天上をするかと見しが坤の堤三十間ばかり崩れ
たち堰水溢て寄手の陣屋をひたし多くの軍兵水
におぼれて死したるハ不思義なりける事ともなり
そさしもの堤を築たてし元の如くになりしかバ
水ハほとなく深くなる城将太田次郎左衛門尉士卒
を集めて申様ハそもそも當國舊住のものなれハ根來

第一の大壇那なる縁によりて根来の滅亡を見るに忍びざることを援んためになほ籠城をしたりしは根来と共に存亡を同しくすることを本よりの義と云ふべし但世の情態を観るに今の秀吉は氏も素性も知れぬものと人はいやしめど其武威さかんなること朝日の昇る如く時々に高く刻々に照まされは諸国に代々を重ねたる英雄大名かともされは帰伏して背くものなしましていはんや我々如き小身のものをことを敵としてこゝに数日を過しかう秀吉にも深く物をおのそれは面々の武勇のかつと日本国よりしるしとなるへしそのうへ当城の

ちからくたり共後援あるべき頼もなし終には水底に溺死して長夜の闇に迷ふ鬼となりなんと疑ひなかるべしそれを知つゝかの上に日夜をおくりなむたらんよりハ無罪の一揆郷民とも死と共にせんと不敏なから早く此旨を以て秀吉に降をこひ我々自殺して衆人を助くへしとて櫓に上り寄手を招き次郎左衛門尉か心中を申ければ秀吉公聞食かくの如く水をもつてせめ立つるは日あらずして城中ことにみなしにたるべきこと明白なりしかるを五千余人の内よりハ止ことを得ず心ならずも一揆に与せしのものもあるへしそれ等を殺さんこと国主の仁心にも

背けり因て格別の慈悲を以てなりしと赦を間張本
人なりし自殺をへし其の餘の男女さゝに一人た
りとも違論に及ぶべしと仰出されけるにより次郎
左衛門尉えらしめ一揆の本人三十餘人検使を乞自
殺しけれハ即時に堤を切落しなひけると
流布本に太田次郎左衛門尉城中の手負死人ま
たハ重病人の助かるましきもの百余人の首を
出さしと記せし誤なり太田次郎左衛門とらひ根
来法師以下三十餘人秀吉公の知なひし名字の
ものとも自殺をしけるにより岸和田に葬り
なひしと云今に其墓存せりと云り甫菴本にハ百

五十三人切腹とあり
寄手のうちに一揆の面をたしかに知さるものなし
し此三十餘人いかなるものか不審なりと云し
かハ秀吉公きこしめし元より一揆のことなれバさを
る名誉の侍と日を同しくいふへきにあらさバ大将
といふも一村一郷の名主郷士に過されハ百姓と
格別の品なけれバさりながら歴々の眞似して小
さけなしとも一城によりたり御出馬を待て弓鉄炮を
とりち合戦しける殊勝さハ大名衆にもおさ〳〵劣
らざりける武士の作法通り城の本人自害して總
軍を助命をこふと申渡をしなり誰か首にてもありと

なを本人なりとハいへそれまでなりと仰出され
からからと笑ひあひ太田次郎左衛門生かへりて百
人二百人に及ぶともおそろしからバと仰られし
と聞の舌をふるうて感じけり
陰徳太平記に太田の城の東の方宮部善祥坊が
役所の塘くわつと潰たりといへり又秀吉公宗
徒の者五十人切て出をへし然ハ残る奴原あれ
と騒くへしとありけるにより水汲薪取とも五
十人切て何某此某と假名實名札に書て出しう
へ塘を切落し一揆共こそ散々と落うせしとい
ひ此後根來へ使を遣さし鉄炮三千挺出をへさ

由仰られしに根來の若大衆たち聞ハ終に滅亡
に及ふとぞいへり

秀吉公高野山を攻る事
并紀州平均の事

内大臣秀吉公年來紀州根來雜賀那賀のものの共我
意につのり王威とも崇めハ武命にも從ざるを
と惡ミおもひしかともなと伐へき暇なけれハ一
日一日と捨置しかとも今年天正十三年三月思
ひの如く根來寺を攻滅し雜賀那賀の一揆を打
平け数年の欝懐一時にそゝがれ満足のあまり此
席に國中平均に治めえやと思召立しより年妻部

へ押寄給ふへき由を披露ありけるに熊野本宮新宮那智三山の別當以下をへて秀吉公の本陣へ参上し万端御下知に從ふへき旨言上に及ひしかハ秀吉公にも御感ふのめられを弥熊野三所權現の神詑の如く曲らさるを以て神慮となし偽なきを本願と定め和光の影あきらかに國土安穏の恵を垂給ふへき祈禱を勤となすへし然るに不入兵器を貯へ無用に甲冑を造り武士の眞似をすること以の外に不當なり向後に於てあること慎むへし万一約束に違ふて神速に軍勢をさし向社頭を破却し別當神人を殺害をへし當國の奉行として太田の城に

中村孫平次を差下を間謹て其下知に背くことなからしと申渡されそれより粉川の施恩寺に法度を申渡されし泉州の槙尾山退治ありて高野山へ押寄給ひけり然るに高野山にてハ秀吉公の出馬ありしことも知を満山會合して七口に勢を分ち登山の武士を防かんと企けるを見て加藤福嶋以下の諸物頭たち大に怒り僧法師の身として弓箭兵仗を取武士と對揚せんことを計ること以の外の慮外なり其義ならハうこそしより火箭を射て焼立呉んとて既に其用意に及ひけるを秀吉公聞召諸物頭の怒ハ尤のことなれとも我ゆるしなきより此山を破

却てへしとハおのれバたゞ末代の僧徒等不似合の武藝とたしなミ入用もなき公曹搶刀弓箭を貯へ鉄炮を蔵し置こと高祖大師の遺誡にそむき莫大の僧糧を聚て諸浪人を扶持しやゝもすれバ闘諍に及ぶ一事として佛法興隆のためならバ偏に天魔の所為に似たるを戒しめ沙汰せんが為なりさとハ我本意大師建立の靈場を馬蹄にかけんとをバ面々もよく此意を得て執計ひ申べしと仰られけるにぞ何も感心して退出しけるそのゝち加藤虎之助清正を御使として高野山へ上されけるに清正紺木綿の羽織に白檀磨きの金胴を着し

銅造の太刀を帯し小さき童一人召具して登山ハたし清正が手の者ハ兎河根神谷の宿に残し飯田覺兵衛森本儀大夫木村又蔵井上大九郎斎藤立本鵜平次六人と雑兵四五十人ハ山門の傍に扣えさせたりさて清正高野山に到着しけるに一山の大衆會合しまづ両門主をはじめ検校法師碩學いづれも出仕して内大臣秀吉公の御使を請し奉りける處に若き法師原ハ當山草創より以来守護不入として王命も武命も用ひざる処なるに秀吉何人なれバ自由に我山を進退せんとするやいざさ使者の首を切て秀吉の暴逆を制止せへしかれ我

等ら私の意に非ハ高祖大師の御心なり同心し而
へ大衆たちとゝさゝ立ける処に佐久間入道末座
より進ミ出て申けるハ若大衆の僉儀左あれハ聞え
ぬへども内府の本意僧の身として刀劔を弄ひ弓
箭を執て武士の眞似をるといはしめ沙汰をんら
為とかや然ハ全く以て大師の本願と同しとなり
其上に使者を切んこと實に大衆の恥辱と申べくや
とありしかとも聞入る大衆もなくかくその加藤
とやらんハいかなるものぞしや顔見て呉んと立
上り幕の蔭よりのぞき見んと進む處に何事そ騒
騒しといひつゝ此方を見廻そのものをよく見れハ

その長七尺ちかくにして色白く眉目うるはしき
大男なりなれハ誰そと問訊ぬるにあれこそ加藤
虎之助よといふにそれゝ今まで腕立したる若僧とも
色青ざめて身をふるはしあれハ實に人なるにや何に
いまゝあらびをしや天狗の化てこしものか何に
も人間とハおもはれずおそろしや首切んといひ
しことを聞れけらん我にハあらしといひつゝ尻ご
みして逃げたるハよにおかしく見えるなりけりその
のち成就院法印申されけるにぞ我も我山大師
遺跡として勅願の祈禱を修行しけるによりて上ハ
天子より下ハ攝政關白将軍納言等の寄進し奉る

所領の地紀州大和和泉に於て廿八万余石に及ぶは大師の法験とハいふものゝまたハ奇代の朝恩といふへし根來山ハ覺鑁上人の跡にして真言新義の靈場なるうへ十二万石余の地を領しその冨にまかせて武命を忽緒しける故に今滅亡したる當山にても廿八万石の勢をたのミて秀吉公の命をそむきし根來と相似たり當山は廿八万石の勢あれハ秀吉公にハ三百万石の勢ありいかで廿八万石の力を以て三百万石の軍に立むかふへきよく〳〵思慮をめぐらし根來の先蹤にならひ給ふなかれといひける処に極樂院の梅道といふ

ものいひけるも秀吉の使に對面あるへくハ使者の口状に付てまさ異見もあるへしと申により何さまきらはへしとく清正を客殿に招き入けれハ木食興山上人出むかへ秀吉公の仰のおもむき何事にやといへハ清正はもとハ秀吉公勅命により紀州進發ある上ハ勅願所たる高野山第一に参上し勅諚にまかせたまひ紀州平均の祈禱を修してこそ勅願所たる法務あるへけれともさるはを根來山熊野三山粉川寺等にも勅諚にまかせたまひけるに野山より今以て何とも申越るゝともなくかへりて七口に逆茂木をひき編に合戰の用意にをよそれハ

条違勅の咎のかれかたく処なくは率土の濱まで王臣なる僧俗をいはんや普天の下王土なる山林田野をところたんはゆるされなから高野山に於ては勅定に従はさる定めあらは何ぞ勅願の霊場といはんや大師の権化高徳なるを嵯峨天皇の叡慮を尊奉なし給ふ衆徒の法験いちじるくともそてに大師末流の弟子あらんや如何ぞ今上皇帝の綸旨にそむく道理やある是等の処たしかに勅答申させ給へしといと厳重に申渡しければ木食上人はくしんく勅定に従ふへきよし我御請申けるによつて清正はさらて然られ某と共に下山あるべしと申渡しければ木食

上人一儀にも及ばず清正にまかせしかは秀吉公の本陣にいたり秀吉公を拝し勅命を述めんし大師の遺告に従ふべき旨を言上しければ秀吉公にも尤のことなりとて高野山へ軍勢をさし向給ふにあらされ御ゆるしありけれとも廿八万石を没収しそろに四万石を寄附し給ひしかは高野山にかゝへ置ける諸浪人もあらくやうく払はれしに仕官したまひりとかやかくて赤松半兵衛神子田弥左衛門を奉行として紀州加田浦に於て数百艘の兵船をつくらせ給ひ又吉野十八郷のものに千本の槍を出させ熊野の押となし給ふ

重修真書太閤記十編巻之八終

重修真書太閤記十編巻之九

長曽我部家系の事
并軍議評定の事

土佐國ニ長曽我部元親と云人あり其先祖を尋ぬるニ唐土秦の始皇帝の孫陣譽といふもの皇朝へ帰化してありしかハ信濃國ニ住しけり此人文武の達人なりけれバいつしか天聴ニ達し上洛なすべき由宣旨のありけるニよつて遥々と九重の都ニ登りしかハ早速衛府ニめし仕られ奉公の労を重ね叡慮ニかなひつるニよつて秦の氏を賜ハりしとなり是

ハ人皇十四代仲哀天皇の御宇のことかやとそれより子孫繁栄し人皇三十二代用明天皇の御時守屋大臣といふ人佛法を信せす寺を毀ち佛像を傷く秦氏十五代の苗裔に川勝といふものあり聖徳皇太子と共に守屋を誅戮し佛法を興隆しその功を賞せられ土佐國長岡の郡を賜はり曽我部の郷に住しかは長曽我部の秦氏と唱へしなり又その子孫香美郡に住ものを香曽我部と稱をそれより多くの代を累ね秦の能俊か時に至り枝手大門両郷三千貫文を知行し京都の大番懈怠なく勤たりしかある時別勅を以て天盃を賜はりけるその御

盃の中に酸漿の葉浮ひたりけるを以て定紋となせしとなり能俊より又三代を經て秦信俊といふものあり足利尊氏将軍に従て勲功ありしかは長岡一郡の主となりつるなり信俊の孫を秦元秀といふ即元親の祖父なり此頃土佐國には一條權中納言兼定卿とて高貴の御方おはしましけり抑土佐の一条家と申は關白右大臣兼良公はしめて御下向ありしよりそのうち關白左大臣教房公權大納言房家卿中納言房冬卿權中納言房基卿まて五代相續て國務を執行ありけるに房基卿逝去の後御家督ましまさゞりけるによりて一条關白房通公の

三男として下向ありしハ即今の兼定卿にて又元秀戦死しける時嫡子千王丸いまだ六歳に在けるを一条殿あはれみて御覧し御手元にて養育を加へ十五歳になりける時元服させて宮内少輔國親と名乗らせ國親の嫡子元親なり元親兼定卿の嫡男内政朝臣を婿としたりしのち天正元年九月十六日兼定卿隠居ありて豊後國へ移りたまへハ土佐の國の處置はすべて元親の心の儘にと行ひけり内政朝臣ハ長岡郡大津城に入御ありけれハ一条家累代住ませし幡多郡幡多城へハ元親の弟吉良左京進親貞を入置しかハ幡多郡も自然と

元親の手に入たりしハ今ハ土佐七郡ことく元親の領となりけれハ家臣にハ吉田備中守同次郎右衛門久武肥後守同内藏助中山大和守同忠兵衛重名藏人同丹後守江嶋備後守吉田伊賀守國吉右門尉姫倉豊後守南岡右衛門大夫福嶋飛騨守馬場因幡守以上十五人ハ家老たるべしその外若手の侍にハ江村孫左衛門同掃部助宗名彌次兵衛同将監野村勘右衛門南岡四郎野中三郎右衛門金子傳兵衛國吉三郎山川五郎右衛門横山九郎兵衛姫倉太郎左衛門吉田彌右衛門横山三郎右衛門中山源兵衛同忠八十市新右衛門以上十七人都合三十二人と長曽

我部三十二人衆と云數度高名手柄を顯したるものなれバこそ元親おの〳〵を用ひ諸方に勢を出し時ハいつも大將分になしつるなり又元親の嫡子彌三郎信親武勇勝れたるを父祖に超え次男ハ香川五郎次郎讃岐國の香川信景の養子となれり三男津野孫次郎四男ハ右衛門太郎盛親五男右近大夫と云元親の弟二人あり吉良左京進親貞長曾我部右近大夫泰親と云親貞ハ同國蓮池の城主福田一条殿と戦ひその家臣中村越後守を降し伊豫國壊山地本川にて切従へ安喜の城主山城守と戦ひ新城穴内安喜の三城を同時に攻落し城主山

城守家臣黒岩越前守に腹切を豫州名張にて栗名丹後守を置て是を守らせる一条殿旗下久松の城主佐武信濃守を降らせ其勢に乗仁井田表の敵ども賀文志和西原伊豫是等と合戦しつゝ悉く降参させ下田の城を燒討に責落し土佐七郡を切従へ一の宮高賀茂大明神の社頭を再興し神事祭禮舊規にたちかへし執行をなしたり抑高賀茂の神と申ハ土佐郡郡家の西四里にありと此國の風土記に見えたり一言主の神とも味耜高彦根の神とも申をなり一言主の神といふハ大和國葛城の山に鎮坐ましまして大己貴の御神の御子高彦根命の

御事なりまさ味耜高彦根命と申ハ下照姫の兄な
どハ大己貴命の御子なること論なし然どれ高彦根
と申も味耜高彦根と申も同し神と知へしその後
羽深吉良川室濱野田浦等と戰ひ敵敗北しけどハ
追討をしきと数度よしきて室戸津田東寺灘目三半志
井采名等と合戰し一条殿を謀まて隠居させきの
ちハ誰一人手さ爪ののもなきよし讃岐を攻從
へりて阿波を調略し三好を窘め今ハ四國
一圓ま我旗下となりしらハ三十二人の猛將を擇
ミ出して伊豫阿波讃岐三ケ國へ分遣しまれを治
めしめ其身ハ土佐の大濱ま城墎をとりまへまさ義

植將軍の公達を大將軍と仰ぎ奉り是を都ま入奉
るべき軍の名となし東北の海をわたりて上國へ討
出んと兵船あまた用意し風を待てそ居たりける
義植將軍の長男亀王丸と申ハ實ハ義澄將軍の
御子なり永正五年六月義植西國より上洛あり
て再度將軍ま任しまへハ義澄將軍ハ解官をう
け江州九里へ落玉ふ然るま六年亀王丸誕生あ
りしかハ義植將軍養ひ取て御子となし玉ふ母
ハ細川成元女と云細川系圖ま成元といふ人え
え爪亀王丸元服ありて義冬といふ天文三年廿
六歳の時阿州へ下向あり從者三百六十人とり

や其頃阿州ハ細川讃岐守持隆四國管領として勝瑞といふ処に城て居たまへり将軍の公達といふを以て那賀郡平島庄古津といふ處に館作りて居奉り平島十一村并山分四村をもて三千貫の地を獻をしなり天文廿一年持隆三好か為に弑せられしかハ義冬周防國に下向せらる四十四歳の時なり北の方ハ大内義隆卿の妹なりしハ彼國に親しく申通せる人ありしなるべし然るに北方永禄年中周防にて逝去のちふたゝび阿州へ帰りたまひ平嶋に住たまひ天正元年十月六十五歳にて卒たまふ其子三人義親義助義任といふ義親ハ永禄九年阿州撫養にて卒し義助ハ天正十三年四十五歳義任ハ四十三歳義助の嫡子義種ハ十二歳なりし元親の奉をしハ何人なるや本書に義景将軍の君達辰九君を左衛門佐義國と号し其嫡子鶴九十一歳なるを大将軍と仰くと云り義景といふ将軍なし

然るに根来滅ひて後熊野高野の如きまて秀吉の武威になひき従ひ紀州一國全く平均しけれハ元親もなかしひに度海し却て其鋒を挫られハ如何と見合居ける処に讃岐國へハ秀吉の先手仙石權兵衛尉秀久おしよせり年貢を出さぬものの十三人を

捕て宇多津聖通寺山の麓にてこと〴〵く烹殺し香東郡安原に籠りし安原甚太郎以下十二人を聖通寺の山下に磔にし百餘人を獄門にかけ阿波國へハ蜂須賀家政打入て國中を切靡けゝるゆゑに元親の拘え置し撫養嶋木津一宮の城々より急を告けるにより元親諸将を集め申けるハ秀吉といふハ氏も素性も慥ならぬものと聞り然とも軍の道にかしこく謀よく運に叶ひつるを以て既に中國北國を切従へ今南海道のうちなる紀伊國を平均に治め終に四國に渡り我旗下の國々を切鎮めんとせらる誠に時節到來と云へし併元親若年に

り四國の棟梁として百万の衆あり居ながらにして是を待んと謀あまりに拙し先とる時ハ人を制し後るゝ時ハ人に制せらるゝとて海上に打出てお きを謀るへしといひければ子息盛親聞もあへず父君の仰にハ候へとも海上に出て待へしとハ千慮の一失と覺え候某が思案にハ伊豫阿波讃岐の堺に要害を見立そこへ勢を分ち朝がけ夜打して掛なやまし候ハんにハ十万廿万の勢も恐るゝに足べからずと申けれハ何も此議に同し然ハ手分とおさやとて三州の堺目〳〵に人数を配りて待かけゝり

石田佐吉三成長曾我部元親へ使節の事
并秀吉公四國攻決定の事

内府秀吉公紀州一圓に平治なし給ひしのち其の上洛ありて直に參内ましまし根來高野熊野等の事悉く奏聞ありけるに主上にも秀吉公の本意王室を尊崇しまゐらせん為にして一身榮耀の樂を專らにせられんとには非る由を知めし叡感もつとも厚かりしかバ秀吉公面目を施し聚樂に入御ありて諸將を勞しそれぞれに恩賞を行はれしかバ何とも織田殿よりハるかに立増りたまへる大將かなと歡ひけるよりいよいよますますに内大臣殿の威

權まさに朝日の昇るが如くになりにけり此時東海東山北陸山陽山陰南海の大小名ことごとく上洛して參内を遂その分限に從ひ公役を勤めける中に四國の長曾我部いまだ使者をも奉らず上洛もせず王臣として王室を尊ばず王土に居ながら貢を入ざること憲法の許さゞる處なり早く誅伐あるべけれどもいかにも土州ハ海嶋の一隅にして南海のはてなれバ王法久しく弛びて令式もそれに廢れたるが如し邊鄙の者なれバ柔遠の仁慮一个の使者に申含め土佐へさし下し元親の心底を聞たまひその答によりて御處置あるべきなりとて石田

左吉三成と土佐へ下されけり左吉支度調ひ出立けるとき内大臣殿左吉をめさせいかに三成承るも秀吉ハ木下藤吉郎といひし昔より今内大臣の高官に進ミしかとも一日片時京都と跡にをしとなし是ハ天照大神の御裔にして高皇産靈の御筋なれハかりそめにもおろそかに思ひ奉るへきにあらすと骨に刻ミてよくよく存ハなり然るに元親もとの凡下のものなれとも天照大神の御慈ミにより今日と曉昨日と暮をしるにあらすやその御恩をわすれて上洛もせず使者も貢も奉らず四國を私のものになして心のまゝに振舞とあそ心得ぬ

やく阿波伊豫の二州を返上し早々上洛して王威をとうとミ申へし左あらんにハ土佐讃岐ハ申賜りて得さすへしと申をのし又兎角申ならハ神速に軍勢をさし渡し元親か一類をへく征伐あるへきなり能々思慮して御請申をと仰られけれハ三成かしこまりて御前を立とき福嶋市松申けるハ四國への御使を石田一人に仰付られしこと心許なし正則相ともに下向仕るへくいと望ミし時三成正則に向ひ何といそるゝそや是式の御使勤得ぬもとの左吉ならハと申さハ正則いや左にあらず是ハ大事の御使なり正使副使と二人を遣させ

然るへしと申けるを三成とかく争ひけるを
加藤清正片桐且元雙方となさめけるを御覧して
秀吉公正則左様に申さば無し四國の使者ハ左吉一
人にて事足り子細ハ後に知へきなりと仰られけ
るにより正則も御次へたつ三成ハ氣色なふて天
正十三年四月中旬大坂を出船し讃岐國へ渡り土
佐國へそおもむきける讃岐にハ細川源左衛門尉
高松の城にありて軍兵を調練して居たる所へ京
都より土佐へ使節の下向と聞道路の掃除丁寧に
申付たれとも賣物ハ日頃四倍と申付たり扨三成
土州大濵に至り着ハ長曽我部の侍に横山四郎兵

衛といふもの立出三成一人城の大手の潜り門よ
り入書院に通しけるに上段に十二三の少年烏帽
子直垂にて二帖臺に坐し其傍に元親ありて三成
か口状を聞元親申様是ハ前将軍の御孫鶴丸君に
ましまし日本の大将軍と申ハ此君なり秀吉
誰の許を得て武将となるるや覺束なしといひけ
れハ三成うち笑ひ實に御邊ハ四國の田舎人にお
はしましけり前将軍とハ永正のむかし京を出奔
ありて征夷大将軍を解官をうしも阿州撫養まて死
去ありし恵林院殿の御事なりそれより大将軍の
職五代を經て足利の家ハ断絶したることを知ら

こねあるべしよしや恵林院殿現存ましまさば共出
奔解官のことなれば大将軍といへるも由なしいは
んや其孫にいたりては堅固の田舎人無位無官の
少人なり我邦にては天子ほど貴きはなく官位に
て重きはなし秀吉今は正二位内大臣なり恵林院
殿は従二位なれば秀吉より一等下にましませばな
ほ夫と知ながらね元親なれば左様にいへるも理
なれども早く上洛して世の廣きことを知なへやと
云れし元親黙然としてものいはでありて元
親坐を立三成を上座におし居けるにも元親南海
のはてに生れし世のなりゆきを存ぜざれば然なら

遠祖よりかの國を領して更に鎌倉殿よりも京
都将軍よりも賜はらざれば然るより弓矢を以て切
取ては阿波伊豫を返しまゐらせること存知もよら
ず此由たしかに申されよと云て又いふこともなし三成
も言べき様なければ城を出て讃州路へぞかかりけ
るに買物高直なるに用途をはらひ盡し擾るさま
は浮田に銭をかりてゆかし京着し直に御前に伺
候しかくと言上しければ秀吉公聞食されはさ
そ其方一人を遣はしたるなれの余人ならば必
定喧嘩しつべかりけるものをとぞ仰られし夫より
参内ありて四國征伐のことを奏聞ありけるに速に

勅許ありけれハ四月廿六日大坂城より出船し玉
ふその人々加藤清正小早川隆景とハ軍監として
四万余人黒田父子浮田一黨ハ二万五千にて伊豫
國へ向ふべしとなり大和大納言近江中納言ハ六
万余人にて讃岐國へおしよする

重修眞書大閤記十編巻之九

国立公文書館
National Archives of Japan